

パリ、2008年8月20日、21日訂正  
「生への存在」オーギュスタン・ベルク セリジー会議 稲賀 日本語訳原稿  
8月24日(日曜日)発表予定

『胎児の世界』を読み直す—気韻生動を問い直すための準備として—  
稲賀繁美 国際日本文化研究センター・研究員  
総合研究大学院大学・教授・専攻長

「アジアの気は彼方にある」 インゲボルク・バッハマン  
(詩の意味は上のおりだが、ドイツ語では母音と子音の連なりから、アジアが決してベルリンの「彼方」に位置しているわけではない事実が伝わってくる)

#### 前口上

以下の断章は、より大きな構想による著述の一部をなす。「気韻生動」の語源的な探索、アジア近代におけるその再解釈と西欧美学との対峙に関する論考は、すでに別途公表したので、略述するに留める。「気韻生動」は中国六朝の謝赫の『古画品録』に登場する概念だが、人物画の描法に関するその説が風水や山水画と結びつけられるには、唐代の張彦遠や宋の郭若虚『図画見聞誌』を待たねばならない。20世紀初頭期の中国では、文人画の理念を蘇軾の士大夫の境地に類比した。これに対して、同時期の日本では、気韻生動にこそ文人画の精髓を見る解釈が行われ、それが南画復興につながった。こうした中日の南画再解釈の潮流が合流し、西欧近代の美学に対する対抗言説が紡がれる。石濤に南画の思想的・表現的到達点を見るような解釈も、近代東洋における西欧思想との対決の成果である、と筆者は考えている。たとえば1920年代には、リップスやフォルケルトによる感情移入Einführungやカンディンスキーの藝術における精神性das Geistige、「内なる響き」Innerer Klangに関する議論を凌駕する思想が、すでに東洋古代に存在した、といった議論が頻繁になる。ここで改めて注目された「気」の概念は、とりわけ西欧近代科学とは相性が悪く、迷信や非合理主義と結びつくため、これまで頻繁に議論されながらも、科学的見地から忌避されることが多かった。だがベルク氏はそこにécoumèneに内在する médianceの発露を見出している (Berque 2000 : 198)。

本試論では、文献学的な意味での気韻生動への直接的考察はいったん脇に置き、ベルク氏の著作のうち*Être humains sur la terre* (Gallimard, 1996), *Écoumène : introduction à l'étude des milieux humains* (Belin, 2000)ほかに展開された思考を手がかりに、「生への存在」に至る過程で重要な位置をしめる発生学と「風土」milieuあるいはécoumèneとの関係に焦点を絞る。いわゆる東洋的思想の西側世界との交渉という、より広い文脈でベルク氏の考察にあらたな次元を加えるべく貢献できれば幸いである。ベルク氏の従来の著作には言及のない日本の思想家としては、たとえば井筒俊彦、三木成夫との対決は不可欠かと見受けられる。井筒に関しては、華嚴思想との関連で別途英文による論文を執筆したので、以下では三木成夫の豊富な議論を欧米語での議論に耐えうるように単純化し、議論の出発点として提供したい。気韻生動の命運とのかかわりは、将来、論点を統合して提示したい。

\*\*\*

### I 発生学的記憶

#### I-1ヘッケル再訪

個体発生は系統発生を反復する。ヘッケルが唱えたこの仮説は、その後痛烈に批判され、今日では言及することすら陳腐とみなされる。だが桶といっしょに赤子を流す愚を犯してはならない、と三木成夫(1925-1982)は警告する。この解剖学者、古生物学者の、人口に膾炙した著作を手がかりに、まずヘッケルの仮説に孕まれた可能性を探り、世界に生を受けることの発生学的意味を問い直してみたい。

脊椎動物の胚の発生を観察すると、その過程で、たとえば両生類に特徴的な相貌が爬虫類のそれに交代するといった段階が見える。鶏の受精卵では、発生4日目に脾が胃から分離しはじめ、これに付随して肺静脈が発生する。解剖学的なこの変化は、排泄物の組成にも現れる。それまで主としてアンモニアを排泄していた胚は、ここでアンモニアの排泄をやめ、それは尿酸に変化する。この劇的な変化は、将来中国科学史研究の泰斗となるジョゼフ・ニーダムが1930年に鶏の胚を乾燥させてその化学物質を計量することで発見していた。この変化は、生理的には、魚類から両生類への変貌に対応する。鰓呼吸が終了し、肺呼吸に移る。こうして鶏の胚は、魚類としての生活をやめ、上陸して両生類になった、といえる。

脊椎動物の上陸は、進化の歴史にあって画期的な事件だった。この進化の過程が鶏卵のなかの受精胚によって再演されていた。養鶏業者は4日目の受精卵が一時的な虚弱になるが、翌日には元氣を取り戻すことを、経験的に知っている。胚はここで大きな試練に直面しているわけだ。そして5日目の胚を観察すると、そこにはすでに極微の姿ではあるが、まがうかたなく雛の形をした頭部が見分けられる。鶏の個体発生はこのあともはや急激な変化は見せず安定状態で推移する。

このようにして、古生代のデボン紀から石炭紀にかけて1億年を要した生物進化の一階梯が、ちっぽけな鶏卵の内側で24時間に足らぬ時間のうちに短縮されていたことが解剖学的に確かめられる。生物進化の古代の記憶が鶏の胚のなかに閉じ込められていた、とってもよい。自らの実験によってこの様態を観察した三木成夫は、しかしながら「個体発生が系統発生を反復する」という命題は不正確であると、断っている。ヘッケルが用いたrecapitulationという用語は、caputすなわち「頭」という言葉に由来するが、これは三木にとってはあまりに頭脳先行の頭でっかちであり、機械論的、資本主義的といってもよい「勇み足」と映じた(221)。実際、古生物学の見地に照らして系統発生の進化の過程に要した時間を横軸にとり、それに解剖学的な観察に基づく個体発生における形態変化の過程と重ね合わせると、両者にはおおきな影が見えてくる。いわば系統発生は、個体発生の状況を透かして、その軌跡の彼方に仄かな影となって垣間見えるに過ぎない。プラトンが説いたエイドス eidosにも似て、現在存在する個体発生を頼りに推測する不在の理念が系統発生の姿である、といってもよい。ゲーテの『植物変態(メタモルフォーズ)探求』(1790)を高く評価する三木は、これこそゲーテや原像Ur-bild、原-典型Ur-typusと呼んだものだろう、と想定する。

#### 古代の無意識的記憶

この系統発生(三木の用語では「宗族発生」というエイドスに、三木は「おもかげ」という特異な訳語をあてる。これはすでに亡き者の追憶の像を意味する言葉だが、思えば系統発生を演じた古生物たちは、すでに絶滅して現存せず、ただわれわれは「生きた化石」たちにその「おもかげ」を見るにすぎない。ギリシア語で真実とは「忘却の川を渡らないこと」a-leteiaことを意味していた。同様に系統発生の真実とは、個体発生を手がかりとして、その背後・彼方に、膨大な時間の堆積を透かして微かに見分けられる幻のような存在だろう。折口信夫の常世論(1920)に事寄せて、それは隔世遺伝(atavism)のように露呈する懐郷心nostalgyのようなものではないか、と三木は述べる。個体発生のうちに、系統発生の「魂のふるさと」がおぼろげに見え隠れする。この現象を西洋の言葉で言い換えるために、三木はルードヴィッヒ・クラゲスを引く。三木は魂Seeleを「心情」と訳し「原像とは現象した心情たちの姿である」と述べる。この言葉は容易にフランス語に訳せない(ドイツ語原文参照が必要)。ここに残存するプラトン主義の限界も、検討を要する。だが今のところ、生物学的な無意識的記憶が、あたかも過去の亡霊のように個体発生のうちに姿を見せることを確認しておけば、さしあたり十分だろう。

亡霊の出現は、種によってその様相を異にする。溪流に生息する生きた化石として著名な両生類たるオオサンショウウオの場合、外鰓が消滅して肺呼吸に移行するには2年近い年月を要する。だが溜水系のクロサンショウウオでは1週間でこの転換が終了する。爬虫類の場合アカウミガメを例にとると、卵が発生を始めて12日目には肺静脈が形成されはじめ、20日目には肺呼吸が完成する。さらに鳥類の場合、鶏ですで見たとおりこの移行は卵のなかで24時間足らずのうちに完了する。オ

タマジヤクシからカエルに見られるように、両生類にあっては、鰓呼吸から肺呼吸への転換は、水中から地上へという自然環境の変化のなかで変態を通じて体験されたが、爬虫類や鳥類以降になれば、この転換は卵の内部環境で反復される。それを三木は、卵殻という保護されたカプセル内部で、あたかも胚が両生類の上陸の体験を、夢身心地で体験しているかのようだ、と語っている(132)。

ここで三木が「夢」という隠喩に頼るのは、きわめて意図的な選択である。じっさい三木はここで胚の変貌を見ると、謡曲におけるいわゆる夢幻能のことが想起される、と述べている。じっさい夢幻能では、死者の霊があたかもゆめまぼろしのごとく、生者に憑依する。そして爬虫類や鳥類にあっては、個体発生における形態的変貌は、系統発生の系譜を反復しながら、あたかも儀式のようにひとつ、またひとつと「古代の形象」を象徴的に、すなわち「かたちだけ」演じなおしているような印象を受ける。まるで走馬灯で夢幻劇fantasmagorieを見るように。こうした三木成夫の叙述は、美術史の分野ではアビ・ヴァールブルクが提唱した「情念形態」Pathos Formelを思い出させる。古代世界に形作られた形象は、あたかも幽霊が再来するかのよう、ルネサンス期の美術に憑依して、死後の生Nchalebenを得たかのごとく蘇ってきたからだ。それが、人間の心的な構造の深部にイメージとして形態が宿る深層心理的な機構と密接に連繫していることも、言うまでもあるまい。その系譜を辿った浩瀚な書物でディディ＝ユベルマンはこのヴァールブルクの発想の背景に、リップスやフォルケルトではなく、フィッシャー親子に淵源を発する「感情移入」の思想が影を落としていることを指摘している(Didi-Huberman 2002)。

### I-3 発生学的記憶と夢

夢幻に囚われるのは病的な兆候だが、じっさいにここには病理がかかわっている。サリドマイドといった薬物が引き起こした災厄が発生学の真実を露呈するからだ。サリドマイド薬害によって発生した奇形あるいは怪物的な病変は、胎児の発生過程が薬物によって阻害され途中で停止されたために発現した形態だった。短い上肢は魚類の鰭(ひれ)に対応し、また死産した胎児の「悪魔的」なまで異様な容貌は、鰓穴がまだ頭部に残存している時期の胎児の顔貌が、そのまま保存されていたものだったからだ(109)。いわばデボン紀の古代魚類やかつての両生類、爬虫類の面影が、突然に眼前に登場した。みずからの祖先であるとは生理的に認知しがたい真実がそこに露呈したからこそ、「病変」に対する心理的な嫌悪や忌避が生まれる。フロイトのいうdas Unheimlicheな感情だが、それらを自らの祖先とは認知したくないからこそ、人は強迫的なまでのおぞましさを感じる。歌人の釈超空の述べた「のすたるじい」の裏面が白日の下に晒されたことになる。

まさにサリドマイド禍は、みたくもない「悪夢」をわれわれに突きつけたわけだが、三木は「夢」の比喩を、作家の夢野久作の特異な思想に負っている。夢野は卵細胞のうちには地球史的な記憶の総体が無意識のうちに宿されている、と信じていた。そこには、精神分析家のフィレイツェが「出産外傷」として説いたような、固体の個別発生にかかわる記憶だけではなく、胎児となる以前の胚の段階にまで遡る母胎＝子宮内部の無意識的記憶、さらには鳥類や爬虫類であった時代の卵のなかに育まれていた「夢」さえも蓄積されていたはずだ。胎児は古生代の一億年を数日で復習するのだから(146)。生命記憶を「夢」として解析せねばならない。

三木はここで胚の発生学に基づき、外胚葉に由来する体壁に宿る感覚記憶を「体壁記憶」と命名し、これを内胚葉に由来する「内臓記憶」と区別しようと提唱する。「体壁記憶」は体性神経系に支配され、その多くが動物的な機構に関連し、容易に意識と結びつく。これに対して、「内臓記憶」は自律神経系すなわち植物的な機構に結びついており、意識による支配を逃れており、内臓の(無)感覚に結びつく。(三木におけるこの「動物」と「植物」の比喩はきわめて射程が深く、じっさいに植物とは、動物の内臓一本を「腕まくり」でもするように、内と外とを逆転して引き剥いた構造をもっており、動物の腸管を外界に晒したものが植物の生態として描かれる(156)。これは環境学のうえにも大きな示唆を含む提言だが、今割愛する)。体性神経系の動物的記憶は、睡眠のなかで無意識へと沈み込み、内臓的記憶のうちに蓄積され、この植物的感覚の興奮が、動物的記憶を呼び覚まし、

かつて体得した出来事が、睡眠中に夢という形をとって、加工された姿で意識の深部に出現する(148)。こうして発生学、古生物学は、睡眠をめぐる考察を媒介として、精神分析と連合し始める。

このような仮説にたつと、夢という現象が、いわば宇宙的な次元を宿していることも見えてくる。プラトンの『パイドロス』が説くようにanamnesisとは魂が身体へと失墜する以前の記憶を想起することを意味する(ベルク2002:67)。これはわれわれの文脈でいえば、個体が自らのうちに宿している、生命誕生以来の系統発生の過程で経験した内臓記憶の総体といってもよい。プラトンやデカルトが想定したのとは違って、どうやら魂とはイデアの世界や脳内の松果腺に宿るのではなく、内臓の植物的無意識のうちに、なかば忘却されて宿っているらしい。それを示唆するのが胎児の世界のうちに宿る系統発生の夢であり、三木はこれこそが深層記憶と称されるものの本体だろう、と当たりをつける(148)。むろん個体発生が見る系統発生の夢は、サリドマイドによる中断などの事故が介在しないかぎり、遺伝子による設計図どおりに連鎖反応を起こし、「一糸乱れぬ」再現の道筋を辿る。これに対して、睡眠中の夢は、圧縮、置換、変成など、さまざまな「酔狂」をともなった再燃と称すべきであり、両者の発現様態には著しい差異が無視できない。

とまれ10ヶ月と10日あまりの胎児の発生のうちに、35億年に達する地球生命の記憶が圧縮されて展開される。海の懐かしさや、母乳の味の特異さにまで言及する三木成夫の挑発に乗って、いささか想像を逞しくするならば、生体が経験する無意識的記憶が、視覚や触覚あるいは聴覚よりも、むしろ臭覚や味覚といった感覚に結びつく傾向を帯びるのも、あるいはこれらの2器官が発生的に外鰓から化象し、内胚葉に由来する内臓感覚と深い関係を持っているためかもしれない。

## II 胎児的存在

### II-1 生命の極性と回向の往還

こうした発生の絵巻を司る力動を、三木は「いのちの波」と呼ぶ。これは、われわれの文脈に即して言い換えれば、宇宙の「気韻生動」の謂であろう。ルードヴィッヒ・クラウグスに深い共感を示す三木は、生命の波動の特性として、分節化と双極性とに注目する(185)。ここで三木は、いまひとつの生きる化石、円口類のヤツメウナギを取り上げる。その生涯は、「食の相」と「性の相」とのふたつの局面に分割された波形を描く(157)。リチャード・ドーキンスの議論を経た現在では、自らの栄養補給に専心する「食の相」に自利的egoist、自らの個体は犠牲にして子孫の再生を目指す「性の相」に他利的altruistという形容詞を当てはめてもよいだろうか。ヤツメウナギにあって、この両者はたがいに両立不可能だからである。

幼名アンモシーテスと呼ばれる段階では、この原始的な脊椎動物は、自分の尾を砂の中に埋め、口を大きく開けて、鰓の作る水流で口に入るプランクトンを栄養とする。成長するとラムペトラと呼ばれるが、これはラテン語でその名のおおりの、岩(ペトラ)を舐める(ラム)ように貼り付いて移動するからである。口は岩に貼り付いているから、当然の帰結として餌を漁ることはできない。成長したヤツメウナギは断食して生きている。内臓は退化して切れ切れとなり、生殖のための材料(卵巣あるいは精巣)に圧倒され、そこに寄生虫よろしく纏わり付いているだけの状態になる、という。捕食の相から生殖の相への変貌は「変態」に等しく、もはや逆戻りはできない。

思えば、自己成熟と生殖・再生産との分極は、より進化を遂げた生物にも残存している。見やすい例を挙げるならば、回遊するシャケを考えてもよい。孵化したシャケの稚魚は故郷の川を下り大海に躍り出て成長するが、生殖の時を迎えると生まれた河川を遡る。産卵と精子の放出とを終えると、シャケはその生涯を終える(171)。ヤツメウナギの食と性との極相が、シャケでは海への旅と川への回帰という往還に翻訳されている。そして思えば、こうした往還は人類においても、生物学的な再生産のみならず、知的な再生産の次元でも、なお反復されている。ゲーテのヴィルヘルム・マイスターではないが、丁稚奉公の修行時代は、自己陶冶の時代。これに対して、マイスターの称号を得た職人は、後継者の養成にその後半の生涯を捧げる。生涯前半の自利行為の代価は、生涯後半の他利行為によっていわば賠償され、それが前の世代から次の世代への技能伝達を司る。これは

仏教の世界では二種回向と呼ばれたものだろう。往相から還相への折り返しは、学びから教えへの転換であり、華嚴の世界でも自己修行によって理事無碍、事事無碍の悟りを得たならば、それを衆生に伝えることの大切さが説かれている。その往還の意味を、哲学的に掘り下げ、晩年の『大乘起信論の世界』にいたる著作で、自らもたゆみなく反復したのが、井筒俊彦の「東洋哲学」の営みだった。故郷への帰還とは、そうしてみると、回遊魚の営みの知的な昇華反復であるだけでなく、脊椎動物の原初の生活をひそかに想起しつつ模倣する営みだったことになる。

## II-2 胎児の世界あるいは子宮に棲むこと

子宮という器官は、往還の極相を、時間軸のうえのみならず、位相空間として体現した器である。人間の胎児は日本語の慣用表現では受胎後10ヶ月と10日を子宮のなかで過ごす。羊膜に包まれた胎児は、それを満たす羊水の海のなかにどっぷりと浸かり、発育が3ヶ月を迎えるころから羊水を文字通り舌なめずりして飲み込む。羊水は飲み込まれ、また胎児の尿として排泄されるが、と同時に胎児は同じ羊水を、こうやってよければ胸一杯に飲み込み、またそれを吐き出す動作を規則的に繰り返す。液体を肺臓に出し入れする反復動作を、はたして呼吸というべきか、いささか困惑するところだが、この「羊水呼吸」は、出産に至る瞬間まで続けられる(62-63)。いうまでもなく胎児の体内のガス交換は、臍の緒内部の動脈と静脈によって確保されているから、胎児は生理的には羊水呼吸などしなくても構わないはずだ。ところが母胎の呼吸が浅くなったりして、血中の二酸化炭素の濃度が上昇すると、この変化は胎児の延髄の呼吸中枢によって感知され、胎児もまた溜息を漏らすのだ、という。あたかも胎児は母親の倦怠を理解したかのように、母親の嗟嘆が胎児にも伝染して、まるで「二重唱」のような現象が発生する。

ここで進化の道筋を解剖学におぼいしておくなら、魚類の鰓穴と肺とは同一の起源をもつ。発生学的には両者は「相同器官」である。古生代に生息した魚類や両生類などの脊椎動物の水生卵の場合、その胚は卵膜に包まれて、太古の海を漂っていた。卵膜内部の液体の組成は実質上、外の海と同質で、両者はいわば融通無碍な状態で交流する(64)。これが中生代の陸生の爬虫類や鳥類の卵となると、胚は羊水中に浸された卵膜のなかに漂っている。この胎児を包む袋は、実際には胎児の表皮が翻転して出来上がった袋であり、そのなかの羊水の成分は、太古の海水に酷似していることが、古海洋学から知られているという。海中を去り陸上に上陸した脊椎動物は、卵の内部に、生命を育む「海」を確保していたことになる。

最後に新生代に爆発的な展開を見せた、哺乳類の着床卵を見る。胚＝胎児を包む膜は、爬虫類や鳥類では卵殻のなかの胚に栄養を補給する栄養膜と、排泄物を蓄える尿膜からなっていたが、これらは哺乳類では痕跡を残すにすぎない。そして羊水を湛えたこの栄養膜は胎盤を介して子宮に付着する。胎盤とはこの膜が無数の絨毛を出して母胎の血流を取り込む部分であり、取り込まれた血流は臍の緒を通じて胎児に連結する。胎児のガス交換、栄養補給および排泄はこの臍帯を通じてなされるが、胎児そのものは、子宮に接した羊膜の袋のなかで、羊水の海のなかにどっぷりと浸かって生活する。これが哺乳類をして「海をはらむ輩」と呼ぶ由来だという(67)。太古の海水は羊膜のなかの羊水として確保され、胎児をそこで養育する。すべての生命が海と繋がっている様子を、羊水は物語っている。

母なる存在としての*mère*と海を意味する *mer*とは、フランス語では同音語だが、子音の*m*と母音の*a*との結合からなる音*ma*には、言語の起源の差異を超え、地球上きわめて広範な言語に共通して、栄養補給にまつわる基本的語彙が結びつく。印欧語族の所有を表す形容詞もこの音から展開する(*mon, ma, my, meine, mia*など)。ここから文法的主語が実体化される*moi*。インドの古語では*ma*の語根が、欲望の基準(尺度の意味の*mesure*などもこれに由来する)のみならず、認識主体(*manas*識すなわち*mind*)へと派生する。日本語のオマンマ、ご馳走のウマイなども、同様の母音を共有している(38)。ここから三木はさらに議論を発展させ、そもそも欲望の対象たる乳房や母親(*mama, mamel*)と欲望する主体(*moi*)との隔たりを日本語で*ma*間、と発音するのも、偶然ではないだろう、と推論を逞しくする。実体化されない媒介性、インターフェイスとしての「間」のうちに、生命の根源的な双

極性、根本的な間主観性が表現されている、と三木は想定する。言語学的には問題を孕むにせよ、これは子宮存在の解明にとって、きわめて示唆に富んだ指摘というほかあるまい。

じっさい「間」という日本語はベルクが重視する仲介性*médiate*を意味する。時空の隔たりが意思疎通のために不可欠な条件であるかぎりにおいて、メディアというときの*me*は、日本語の*ma*に共通する観念を伝達する乗り物である。西田幾多郎も「場所」の概念を通じて分析したことだが、仲介としての「間」は、直接的な接触が失われ、相互に関与する個としてのあいだの差異を分節するために、不可欠となる。「間」が主体に先行するということは、間隙こそが個の確立に先立つ、ということの意味している(Oshima Hitoshi xxx)。個体を関係の先に立てる西欧思考にとっては、はなはだ逆説的なことにも、分割不可能なアトムとしての個なるものは、それを包む環境の総体のなかにしか生成しない。分割不可能と信じられてきた事物も、実際には個をそれとして認知してくれる風土があってはじめて、分割不可能なものとして立ち現れる。ここには期せずして、華厳の奥義に近い認識が露呈する(Izutsu 1983)。ここに見える、個と関係の束との優先順位の逆転は、気韻生動の概念を再考察する場合にも鍵となることだろう。そもそも、子宮と胎児とのどちらが先かを考えれば、主体をして、それを包む関係に先行させることが、いかに発生論的見地からして倒立した虚構かは、歴然としているだろう。そしてそれは*médiance* に基礎をおく*écoumène*をめぐる考察とけって矛盾するものでないはずだ。

## II-3間とコーラ

ここまで考察をすすめてくると、建築家の磯崎新が提唱した「間」と、プラトンが『ティマイオス』で登場させた*chôra*との類縁性が、あらたな示唆を呼ぶことになる(Isozaki 2006 :97)。そこで人間発生の「風土」すなわち母胎と胎児との*médiance*を司る*écoumène*の機構が問われるからである。刻印されたもの(50c1)でもあれば母型(50d2, Berque 2002 : 38)でもあるとプラトンが述べるコーラは、我々が三木成夫の導きでこれまで見てきた発生学的な見地に照らすなら、まさに子宮のことを指しているだろう。羊水を湛えた器*organon*である子宮は、文字通り始原の海に淵源をもつ遠い記憶に浸されている。地球的な過去を刻印された器官である子宮はまた、受精した胚を孕み、それを独立した一つの生へと至らしめる発生装置でもある(妊娠を意味する英語*pregnancy*を想起したい)。世代間の過去と将来との媒体でもある子宮は、また空間的にも媒介者というよりむしろ生体がそのなかに自らを見出す環境*milieu*であり、それが遺伝的な連鎖を担保する。母であり(*méter* :50d2)かつ乳母(*tithên* :52d2)でもある子宮はコーラの特性を具現しており、それが保護し養育する胎児に(「投射」*projection*によってではなく、まさに「通態」*trajection*によって)、原光景、いわば世界の内化された起源となる風景を、伝達する。

ここでジャック・デリダが『コーラ』に述べた「包み込みの構造」を、必要な変更を加えて援用することもできるだろう。「包み込む構造によって、そこに包み込まれた虚構から、それに先立って虚構のある種のテーマを作り出すが、この先行する虚構が今度は、包み込む形式をとる」(Derrida 1993 :76)。先行する虚構が、われわれの文脈では夢として透視=投資されるべき「系統発生」の物語であり、それを包み込むことで逆に包み込まれるのが「個体発生」の物語、ということになる。この時間軸を転倒した相互包含によって「(個体発生)の始まりよりもより古い(系統発生という)始まりに立ち戻る」(96)ことができる理屈なのだから。もはや冗語だろうが、コーラに検討を加えるにあたって、ベルクが老子の「谷神不死、是謂玄牝、玄牝之門、是謂天地根」を冒頭に引いているのは、三木の子宮をめぐる議論と相まって、極めてまっとうな見識だ(Berque 2000:17. cf. Miki 1983 :203)。

さらに位相幾何学的な指摘を加えておきたい。子宮とは妊娠した母体と生まれ来る赤子とのあいだの媒介を取り持つ間隙=間でもある。こうして子宮と胎児との関係が肝要となる。すでに見たように子宮の内部の羊水は、太古以来の海に似る。潮騒はわれわれに、子宮のなかですごした折の子宮の音を想起させる。浜辺に打ち寄せる波の規則的な反復は、羊水に浸された子宮のなかで胎児が聞く音を連想させる。母体の大動脈が子宮壁を打つ拍動、大静脈の血流が起こす摩擦音。そして遙か彼方からは母親の心臓の鼓動が、遠い太鼓のように響いてきて、これが生命の脈拍の全体を統御

している(1983:210)。子宮内部の生命圏を包むこうした律動の音響に加えて、胎児は子宮の外からくる音をも耳にする。外界の物音や人声が母体を透過して子宮のなかに伝わってくる。これがいわば胎児を迎える宇宙の根源的な音楽であって、胎児はその音環境のなかで發育を遂げてゆく。なかでも母体の心臓の拍動は根源的な律動であり、胎児はそれに同化する。この律動を双極性へと弁別し、拍子に分節して表現行為に結び付けることは、人間に固有の世界認識の方法だ。クラークスに倣って、三木成夫はそのように確認する(215)。

### III 子宮的通態性

#### III-1 羊膜破水と存在論的転倒

ここまでの準備を積み重ねたうえで、子宮の胎児にたいする存在論的(あるいはハイデッガーとともに「存在的」というべきか)次元に踏み込もう。羊水の存在がわれわれの思弁の導きとなる。胎児は羊水中に浸されているが、この羊水は当然のことながら、哺乳類にあつては子宮の内部に溜まっている。言い換えれば、子宮の内なる海は胎児の外皮に接してそれを浸している。胎児と母体との媒介環境とは、この胎児にとっては未生以前の海として現れる。母体の内部に作られた内部(母胎)とは、胎児にとっての外部となる。この「内なる外」inside outの位相転換が、妊娠すなわち子を孕むという存在(論)的機構にとっては不可欠となる。いささか先走るなら、この機構を無視した人工子宮による孵化は、母胎風土への配慮を欠いた無謀な実験となるだろう(cf. Kimura Motoo 1988 :278)。そして母体と胎児とは胎盤によって分割不可能なたちで結合されている。胎盤を通して母体の内部が胎児の外部と会話を交わす。母親にとっての内部の出来事は、胎児にとっては自分の外部の出来事として翻訳される。胎児の外部環境が母体の内部環境であり、しかも両者は個体としての独立以前の相互依存の関係にある。ベルクが説く通態性*trajectivité*、所属が同時に移動でもある様態 *mouvance*(Beque 2000 : 89)は、胎盤の働きのうちにその生誕の、端緒の姿を示している。じっさい、子宮とりわけ胎盤は、存在そのものが発生学的に伝達される場所*lieu*あるいは媒介の場所*milieu*としての原初の「風土」だからだ。「風土はまた人間の身体でもあった」というベルクの発言(Berque 2000 :187)は、子宮と胎児との「間」において発生論的な妥当性を獲得する、といってもよいだろう。

こうして羊膜の内側と外側との「通態的」*trajectif*なやり取りが考察の焦点となる。器と中身との交差、保護するものと保護されるものとの転移の相互性は、比喩ではなく直喩としてメビウスの帯をなす(Berque 1996 :170-173)。2次元の世界で、一本の帯をひと捻りして閉じあわせれば、表が裏へといつのまにか転換される。それと同様、子宮のなかの胎児という、遺伝的な身体的組み込みは、3次元において外部と内部との(弁証法を超越した)位相的転換を準備している(位相幾何学そのものがデカルト的座標軸を出発点としている、といった論難には、あらためて立ち戻る機会もあるだろうが、三木はむしろ捻転の渦巻き、スパイラルに注目する :183)。三木がクラークスに負っている双極性に戻るならば、往還の双極は「往相」として胎児と「還相」としての母胎の相互関係のなかに交差して綴じこまれており、胎盤の血流の満ち潮と引き潮の往還運動は、母胎と胎児とを結びつける臍の緒の螺旋構造によって、三次元的な基礎付けを得ている。分娩の際に、胎児は螺旋を描きながら産道から飛び出してくる(52)が、これもけっして偶然でも気まぐれでもなく、誕生の秘蹟の位相的な軌跡といってよい。羊水は分娩の折りに破水して飛散するが、これも羊膜の内部が外部へと裏返される機構に必然的に随伴する。内なる液体が外部へと流出し、新生児の誕生を促す(52)。

ここでいささか哲学的な考察を付け加えるならば、ここで内部と外部との区別を司っていたのは羊膜だった。より正確に言うならば内部を外部と分明的な環境として拵えていたのは膜組織だった。より一般的に言えば、こうした膜構造が生命の源となっていたことに、生物学者はみな同意している。ハイデッガーは「限界とは、そこで何かが終わるところではない。古代ギリシア人が観察していたとおり、限界とはそこから何かが生成するところのものなのである *sein Wesen beginnt*」と述べている(Heidegger 1958; fr.183; Berque 2000 :77)。この言葉は、羊膜に関して、とりわけ有効な観察だといえよう。「それぞれの空間はその存在をそれ固有の「場所」から受け取るのであって、抽象的

な「空間」なるものから受け取るのではない」。ここで哲学者が「橋」という異質な「端」をつなぐ機構を分析していることも、決して偶然ではあるまい(Inaga 2008a)。ひとつの世代から次の世代をつなぐ「間」ma、時空を含みこんだ「橋=端」こそ、子宮=母体materと胎児=我moiとを隔てつつ繋ぐ、羊水を湛える羊膜という膜maku/peauの袋だったのだから。

### III-2 細胞膜を跨ぐ内側と外側

議論をまとめるに先立ち、ここで議論の水準を発生学から一気に分子生物学の次元に転じよう。分子生物学では細胞膜の内外を通じての弁別的なフィルター作用に関心を注ぐ。ここに物質代謝という生体の根源的な機能を解く鍵があるからだ。一般向きの啓蒙書として話題を撒いた『生物と無生物とのあいだ』で福岡伸一は卓抜な比喻を用いている。「内部の内部は外部である」(Fukuoka 2007:197)。一つの細胞にとってその内部にある小胞体の内部は、細胞にとっての外部環境と等値である。この二重構造をたくみに利用して、生体あるいは動物の細胞は外部からの物質の透過を調整している。まず細胞膜が外部の物質を把捉し、それを小胞のカプセルに包含し、それを細胞の内部へと引き込む。こうすることで細胞は直接に外部に自らの内部を晒すという危険を冒すことなく外部から必要な資材を取り込む。タンパク質の水準での膜生成の機構解明からは、細胞膜を通じた代謝を司る精妙な仕組みが見えてきた(191-234)。電子顕微鏡をより、細胞の水準で観察される、この「内なる外部」の創生は、さまざまな水準で比喻としての教育的な価値を発揮する。

その一例として、どうやら哲学者のジル・ドゥルーズは、胚の発生学のみならず、こうした細胞膜の機構にも、ひそかに目配せしながら思索を巡らせていた形跡がある。「思考するとは襞に織り込むこと、外部を、それとともに伸び縮みする内部へと裏打ちして二重にすることだ。思考の一般位相幾何学は、特異なるものの《近傍》に始まり、《外部の内部へと、そしてその逆に》外部を内部へ織り込むことで完遂される。ここに描かれた機構とは、細胞膜が小胞を作って外部を取り込む機構と、正確に同等である。これはドゥルーズがミッシェル・フーコーの『狂気の歴史』を引用しながら述べるどころだ(Deleuze 1986;2004:126)。すでに20年前のこの考察は、今日の時点では、細胞膜が小胞を作る機構によって追認され、生物学的に正当化されるだろう。

地政学的あるいは地図製作学的な想像力は発生学とも協働する。ロシアの作家ペールイは『ペテルスブルク』で大脳皮質の皺の褶曲を使って、外と内とを転換する。都市と脳とは、互いが他の裏側という関係に描かれる。それを言及しつつ、ドゥルーズは述べる。「内部が外部の褶曲によってできるなら、両者のあいだには位相的關係がある。両者は触れ合っており、その両者を仲介する地層は相対的な外部(したがって相対的な内部)という環境milieuxということになる」(127)と。要するに「個」を形成する主観性というものは、現実には外部との接触によって事後的に形成されるものでしかない。脳を形成する脊椎は、発生学的には外胚葉が陥没してできた溝の後裔である。同様に外部に接する表層が陥没して取り込まれて形成された内部こそ、ドゥルーズが「主体化の帯域」zone de subjectivationと呼ぶ場所だった。ドゥルーズは、魂とは外部に接する表面に宿るとする見解を『意味の論理学』(1969)ではやくも説いていたが、『フーコー』さらに『襞』ではそれがさらに敷衍されて、外部との接触面に宿った意識が魂として内部に取り込まれる機構が分析されている。

### III-3 分子水準での気韻生動としての「動的均衡」仮説

最後に、主体の同一性の問題について、分子水準の議論を参照して、気韻生動をめぐる議論と接続しておきたい。生体の自己同一性は、分子レベルでは恒常的な置換の機構によって維持されているが、その分子置換の速さは、どうやら一般の常識を裏切るほどのものらしい。福岡伸一は先の著作でルドルフ・シェーンマッハーの用語dynamic state of body constituent(Fukuoka 2007:167)をさらに発展させて「動的平衡」dynamic equilibriumという概念を提唱している。生体によって消化されたタンパク質は、体内で早々と燃焼されるか、あるいは無駄な栄養としてそのまま排泄されるものと、久しく考えられてきた。だが窒素同位体を用いた動物実験からは、思わぬ結果がもたらされた。マウスが3日間摂取したアミノ酸総量の半分以上が、体細胞を構成するタンパク質として取り込まれ

ていることが判明したからである。実験過程でマウスの体重には変化がない。とすると分子レベルではマウスの体細胞を構成するアミノ酸は、おそるべき速さで置換されている計算になる。

マウスの体重と摂取された栄養物の重量から推測すれば「3日で」マウスの体を構成するアミノ酸の半分が、分子レベルで別の分子に置き換えられたことになる、と福岡は述べる(160:この部分の記述は、ややあやふやで、福岡に錯誤のある恐れも否定できない)。さらに脂肪の場合に重水素をトレーサーとして追跡調査をしても、摂取された脂肪は脂肪として燃焼されるのではなく、アミノ酸レベルに分解されて体内に一旦蓄積され、またほどなく排泄されていったことが判明した。この計測が正しいとすれば、マウスの体細胞を構成する細胞は数週間のうちに分子レベルではすっかり入れ替わってしまうことになる。さらにこれを人体に適用するなら、1年もたてば人体の構成分子もすっかり入れ替わっている勘定となる。この持続的な莫大な代謝こそが生命の実相であり「生命とは流れ」そのものだ。それが、福岡の提唱する生命観の骨子となる(Fukuoka 2007: 161)。

\*\*\*

この「動的平衡」仮説に照らすならば、いまや気韻生動をあらたに分子水準の生命現象として再定義することも可能だろう。20世紀初頭より、気韻生動は心理学にいう「感情移入」*Einführung*と類比され、すでに六朝期の中国哲学にその萌芽が見られた思考によって、西欧最新の心理学的知見は、とくに「論破」されていた、との説がなされた。(極東の日本では、ここでリップスによる感情移入説と、気韻生動との同定がなされたが、ディディ＝ユベルマンの示唆にしたがって、ヨハネス・フォルケルト由来ではなく、先述のとおり別系統のロベルト・フィッシャーによる感情移入説との異動を考察するほうが、方法論的可能性としては、より豊かな結果が得られよう: Didi-Hubermann 2002:409sq)。筑波大学における国際会議や「気功」ブームの余波で、「気」をめぐる東西文化間の知的対話が暗礁に乗り上げていた時期に、筆者は分子生物学者アントワヌ・ダンシャンとの会話で、「気」とは新陳代謝*metabolism*を指し示す表現として理解すれば科学的知見と矛盾することはない、と述べたことがある(Inaga 1995)。

三木成夫による発生学、古生物学的知見からは、古生物学に関わる生物形態学と、胎生学における形象記憶との関連が検討され、そこに貫流する「いのちの波」あるいは「生命の律動」への理解が深められた。それを発生学の水準における「気韻生動」説と呼んでも、三木は痛痒を感じなかったはずである。これは、まだデカルトとの思想的対決から「生の跳躍」*élan vital*を構想せねばならなかったベルクソンの限界を超えるために、あるいは有効な概念かも知れない。もちろん、遺伝子レベルの分子活動にまで「気韻生動」の概念を安易に当て嵌めるのでは、言葉の定義があまりに曖昧になりすぎよう。「気韻生動」のむやみな拡大解釈は、我われの意図するところではない。とはいえ、福岡伸一の提唱する「動的平衡」に「気韻生動」の現代版を見ることは、思想史上の試みとしては、将来、なにがしかの市民権を獲得するかもしれない。

現段階で、気韻生動が文化史のなかで辿った命運に最終的な結論を下すことは時期尚早だろう。それはまだ、未知の可能性に開かれているのだから。(ギリシア古典概念の問い直しが正統であり、非西欧世界の概念への依存が異端とされるのは、認識論の厳密さとは別問題だろう)。とまれ「生への存在」に豊かな内実と方向性を与えるうえで、思想の触媒概念として、古生物学や発生学の知見を動員し、「気韻生動」を喚起する思考実験は、けっして有害無益ではないだろう。精神と身体とを二分するデカルト的な思考法の桎梏から解き放たれるためには、なお多くの努力と文化間対話が必要なから。

日本語版草稿、パリにて2008年8月21日